

0 2	一 宮	一宮市立南部中学校	クリタ ヤスヒロ 名前 栗田 泰大
分科会番号	1 2 b	分科会名	自治的諸活動と生活指導（中学校）

自己指導能力の獲得を支える生徒指導

～実践上の4つの視点を考慮した段階的包括的な指導を通して～

1 はじめに

本校は、一宮市の中心よりやや東に位置する。主に大志小学校、富士小学校、向山小学校、浅野小学校から進学した約850名の生徒が在籍している。中学校区には多様な環境が見られ、一宮駅に近い市街中心部や住宅街、田畑が広がる地域などから構成される。本校では、教育目標を「心身ともに健康で、知・徳・体の調和のとれた、思いやりのあるたくましい生徒の育成」と設定し、「NEVER GIVE UP! NEVER TOO LATE!」のスローガンのもと、日々の教育活動に取り組んでいる。

2 研究の概要

(1) 研究のねらい

近年、子どもたちを取り巻く環境の多様化が進み、様々な課題を抱える生徒が増加する傾向にある。それに伴い、彼らの発達や教育的ニーズを踏まえ、一人一人の可能性を最大限伸ばしていく教育が求められている。そこでは、個性の発見とよさや可能性の伸長、社会的資質・能力の発達、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とした生徒指導が目指される。その目的達成のために重要となるのが、自己指導能力の獲得である。『生徒指導提要』によれば、自己指導能力の獲得を支える生徒指導として、主体的に課題に挑戦してみることや多様な他者と協働して創意工夫することの重要性等を実感させることが必要だと記されている。その際、留意点として、①自己存在感の感受②共感的な人間関係の育成③自己決定の場の提供④安全・安心な風土の醸成の4つの視点が挙げられており、これらを基盤とした教育実践が求められている。

ここで、本校の生徒の実態を「学校評価アンケート」から見ると、「やりたいことや目標をもっている」という生徒は約70%、また、「人が困っているときは助けている」という生徒は約95%、「自分によいところはある」という生徒は約75%であった。自分や他者のために行動し、自分の長所を認知している生徒は多くいる一方、やりたいことや目標をもつことができていない生徒が約30%、人を助ける行動をしていないと感じている生徒が約5%、自分の長所に気づいていない生徒が約25%の割合でいる。また、暴言による揉め事やSNSトラブル、不登校傾向の生徒への対応も生じており、自己指導能力が獲得できている、もしくは、それができる環境が十分であるとは言い難い状況である。

そのため、本研究では、先に述べた4つの留意点を実践上の視点として取り入れた自己指導能力の獲得を支える生徒指導のあり方を明らかにすることを目指す。ただし、4つの視点の内容はそれぞれ独立して存在するものではない。私は傷つけられず、安全に過ごせる環境下にいるという「安全・安

ア リフレーミング活動

他者や自分の短所を肯定的にとらえられるようにするため、4月にリフレーミング活動に取り組んだ。まず、生徒に自分の短所だと思っていることを書き出させた。次に、リフレーミング表をもとに、書き出した短所を班の友人によって肯定的な言葉に変換していく活動を行った。生徒の感想には、「自分では短所だと思っていたものでも、見方を変えることで長所になる」ことや「他者を肯定的にとらえられると自分の心も明るくなることがわかった」という記述が見られた。



写真1「リフレーミング活動の様子」

イ 生徒会による啓発活動・キャンペーン活動

自主的に、ルールやマナーに基づく行動や環境整備ができるようにするため、生徒会を中心に啓発活動やキャンペーン活動に取り組んだ。

生徒集会を活用して、生活委員会から模範となる学級のロッカーや下駄箱の整頓状況を報告したり、登下校時のルールやあいさつを行うよさについて伝えたりすることで、生活面における行動の基準を示した。また、実践的な力を養うため、生徒会執行部と生活委員会が協働して、整理整頓キャンペーンに取り組んだ。集会と短学活の時間を活用してキャンペーンの内容説明を行い、バッグや雑巾、体育館シューズの整頓状況の点検と片付けを徹底していった。この際、整頓の仕方が視覚的にわかる見本や各学級の整頓状況を伝えるための掲示を作成した。実施後の感想から、「キャンペーンを開始した際はバッグのファスナーが空いていたり、乱れていたりしていたがキャンペーンが経過していくと、協力し合って綺麗にしている人を見かけるほど、みんなの意識が高くなった。」という意見があり、活動が効果的に働いたことがわかる。



写真2「生活委員会による啓発活動」

② 共感的な人間関係の育成

共感的な人間関係を築くためには、互いのよさを認め合い、相手の立場に立って物事を考え、行動することができる力が不可欠である。その力を育成するために協力し、前向きな感情を共有することができる体験的な場を設定した。

ア 学年レクリエーション

5月半ばを過ぎると新しい学年や学級に慣れ始めると同時に、疲れや気の緩みなどから人間関係の問題も生じやすくなる。この時期に友達と一緒に過ごすよさを実感し、よりよい人間関係づくりにつなげるため、学級対抗の学年レクリエーションに取り組んだ。

秋に実施される体育祭を見越した大縄跳びやコートを4つに区切った変型ドッジボールなどを行った。生徒が知っている競技にしたことやそれにアレンジを加えたことで、取り組みやすくなると同時に参加意欲を高めることができた。また学級対抗という形式をとることで、同じ目標に向かい、協働的に活動に取り組む姿が見られた。



写真3「学年レクリエーションの様子」

(3) 包括的な生徒指導（学校行事を活用した生徒指導）

複数の視点を包括して育成する機会となり得るのが学校行事である。学校行事は、自己指導能力を育成する上で必要とされている、主体的に課題に挑戦することや多様な他者と協働して創意工夫することなどの重要性を生徒が実感できる貴重な機会である。また、普段の学校生活で育成してきた安全・安心な風土や共感的な人間関係などの土台がしっかりとしていることで、より効果的で有意義なものとなっていく。

① 予餞会

本校の予餞会を大きく分けると、1年生は会場装飾と学年全体での出し物、2年生からは各学級からの出し物と学年からの歌とメッセージ、そして、1・2年生合同合唱、職員からの出し物、3年生からの合唱と後輩へ向けたメッセージで構成される。

<1年生>

【共感的な人間関係、自己存在感】

1年生は会場装飾として、縦割り活動でお世話になった3年生の各学級目標をテーマにした看板を作成した。また、学年からの出し物として、体育祭の応援練習で3年生から教えてもらった歌や掛け声を予餞会バージョンにアレンジして届けた。体育祭練習時に、3年生と一緒に応援合戦優勝を目指して取り組み、また、優しく丁寧に教えてもらった思い出のあるものを出し物として選択したことで、3年生とのつながりを意識して練習に励むことができた。また、よりよいものに仕上げようと放課の時間を活用して自主練習に取り組む学級もあった。予餞会本番は全員が全力で声を出し、3年生のために自分の役割を果たそうとする姿が見られた。1年生からの学年の出し物によって会場は盛り上がり、3年生からは拍手喝采であった。



写真4「1年生の出し物の様子」

<2年生>

【共感的な人間関係、自己存在感、自己決定】

予餞会における2年生の主な活動は、各学級からの出し物と学年全体で歌とメッセージを送ることである。予餞会練習を始めるにあたって、各学級からの出し物企画班、学年からの歌とメッセージを送る際に使用するくす玉や桜の花びらの作成班、学年からの歌とその振付を考えて学級に教える班、そして、歌を彩るダンス班とに分け、自分で役割を選択し、必ず一役を受け持てるようにした。上記の役割について、クイズや寸劇といった出し物を考えることが得意な生徒、落ち着いて作業することが得意な生徒、学級や学年全体を盛り上げることが得意な生徒といったように、生徒の現状を考慮して役割設定をしたことで得意な分野で自分らしく力を発揮し、活躍することができる

ようにした。

各学級の出し物を企画する際には、縦割り活動でお世話になった学級に関するものという条件を加えた。生徒は、学校生活の思い出に関するアンケートを3年生に実施したり、学校行事での3年の姿を話し合ったりして、クイズや寸劇などを考案していった。また、学年からの歌を決める際に2年生にアンケートを実施すると、喜んでもらいたい、なじみがあるものがないという理由から3年生が体育祭の表現で使用した曲が選出された。割り当てられた練習の時間はもちろん、放課中にも3年生のためによりよいものをつくり上げようと、各班のメンバーが中心となり、出し物や歌を学級で教え合い、全員で練習に取り組む姿が見られた。その練習の積み重ねもあり、予餞会本番は大きな笑い声や拍手であふれるものとなった。



写真5「2年生の出し物の様子」

② 修学旅行

修学旅行は3年生にとって特別な行事である。それは今まで中学校生活を一緒に過ごしてきた仲間と寝食をともにする楽しい時間ということに留まらない。これまでの学校生活で身に付けたルールやマナー、そして与えられた自分の役割を果たしながら協働的に行動する力などが校外で試される、中学校生活の集大成となる学校行事である。

【安全・安心な風土、共感的な人間関係、自己存在感、自己決定】

修学旅行を実施する上で最も重要となるものが生徒の「安全」である。そのため、修学旅行のしおりをもとに、タイムスケジュールやルール、活動の注意点、危険個所の確認などを学級活動や学年集会を活用して行うことで、生徒の不安が軽減するようにしていった。

また、班別の散策活動や体験活動など、小集団を基本とした活動で日程が進むように構成した。班長を中心に、それぞれの生徒が役割を受け持つようにしたことで、一部の生徒に負担が偏ることを防ぐだけでなく、責任をもって自身の役割を果たすことができるようにした。修学旅行当日、班員がそれぞれの役割に沿って行動する姿だけでなく、声を掛け合ったり助け合ったりするなど、互いを尊重して行動する温かい姿も見られた。

班別活動の一環として、浅草か上野での自由散策活動を設定した。散策場所については、各学級で話し合いやアンケートを実施した後、結果を学級のリーダーが持ち寄って決定した。その後、各班で浅草や上野の観光スポットやそこにかかる費用などについて調べ、自分たちで見学や買い物をする場所を決めていった。当日の活動では、自分たちで考えた行動計画表に則って行動するだけでなく、時間や現地の状況、班員の意見を配慮して、臨機応変に活動に臨む姿が見られた。

今回の修学旅行では、生徒から私服で活動できる場面をつくってほしいという要望が挙がったため、服装について自分たちで決める場を設けた。修学旅行のどの場面において私服で活動できるか、もし私服を着用するのであれば、その際の決まりや注意点は何かといった約束事項を規定するために、リーダー会を中心にアンケートを作成し、実施した。学級で意見を集約して、話し合い、再度リーダー会で検討する場を設けた。まとめた意見について、リーダー長、副リーダー長と教員との意見交流の場をつくり、私服で活動できる場面や決まり、注意点などについて協議をしていった。

協議結果について、学年集会時にリーダー長から生徒に伝えた。リーダー長からは、修学旅行での服装のルールやルールの作成に協力してくれたことへの感謝、自分たちで作り上げた決まりをきちんと守るように話があった。生徒たちは、修学旅行の目的や意義を考慮して自分たちで決めた服装のルールを守って行動することができた。修学旅行のふり返しには、自分たちで修学旅行をつくっていくことができたという意見が多く見られた。

修学旅行が終わると、生徒から民宿の方にお礼の手紙を書きたいという声が挙がった。民宿先の方には、寝食でお世話になっただけでなく、キャリア教育の一環として「ふれあいタイム」を設けて仕事について経緯や働く喜び、工夫などについて話してもらった。その際、生徒から仕事に関する質問だけでなく、学校や私生活での悩み相談が出たり、他愛のない話をしたりと、笑顔あふれる交流となった。民宿の方からは、積極的にお手伝いやあいさつをしたり、ルールを守って行動したりと気持ちの良い姿がたくさんあったと報告をいただいた。お礼の手紙を見ると、お世話になったことや楽しかった思い出などが書かれており、短い時間であったものの温かい人間関係を構築することができたことがわかる。



写真6「班別散策の計画を立てる生徒」



写真7「ふれあいタイムの様子」



写真8「民宿の方へのお礼の手紙」

4 仮説の検証と考察、今後の課題

生活面に関するアンケートを実施した。「人を傷つけたり、傷つけるような言葉を使用したりしていない」と答えた生徒が95.6%(できている59%、まあできている36.6%)、「整理整頓や学校でのルールを守ることができている」という生徒が97.5%(そう思う50.9%、まあそう思う46.6%)であったことから、安全・安心な風土が醸成されてきているといえる。また、「学年や学級の仲間とよりよい人間関係が築けている」という生徒は96.8%(そう思う68.5%、まあそう思う28.3%)であり、共感的な人間関係を育成することができているといえる。「学級や学年で自分の役割を果たし、みんなのために行動できている」と答えた生徒は95.5%(そう思う52.4%、まあそう思う42.9%)で自己存在感が感受できる環境が整ってきているといえる。そして、「学習面や生活面で自分なりの目標を決めて行動することができている」という生徒は88.4%(そう思う44%、まあそう思う44.4%)であり、自己決定についても高い割合を示した。以上の結果から、「安全・安心な風土の醸成」「共感的な人間関係の育成」「自己存在感の感受」「自己決定の場の設定」を考慮した段階的包括的な生徒指導を行うことで自己指導能力の獲得やそのために必要な環境を整えることにつながったといえる。

今回の研究を通して、自己指導能力の獲得を支える生徒指導の4つの留意点を視点とし、それに段階性をもたせ、包括的にとらえたことにより、学年や時期、生徒の状況に応じた支援の在り方の全体像が把握でき、各時期や状況に応じた効果的な生徒指導につながるということがわかった。

ただし、他の視点に比べて「自己決定」が低い割合であった。そのため、自己決定の場を積極的に設ける必要がある。また、特別活動等の特別な場面だけでなく、学校生活の多くの時間をしめる学習活動の中でも自己指導能力の獲得を支える4つの視点をどのように意識していくかが今後の課題となる。